

山内先生との思い出

石井 岳 男*

卒論から修論までの4年間、多大なるご迷惑をおかけした私を先生は最後まで教え子として温かく見守ってくださいました。先生との思い出はたくさんありますが、中でも特に印象に残っているものを書いてみたいと思います。

講義・実習を受けていた頃

学部生時代の講義は、多くの文字を黒板に書かれるあわただしい講義だったことを記憶しています。その時は何と几帳面な先生なのだろうという印象を受けました。しかしながら実習では、突然一人を指名し、手頃な石を拾い上げて、斜面のはるか上の方にある露頭めがけてその石を投げ、「お前さん、あそこ見て来なさいよ」という具合に、受け身ではなく参加型の実習をしてくださいました。教官の言うことを鵜呑みにするのではなく、地層を自分の目で見て、それをどう考えるのかが大切なことなのだと教えてくれました。

卒論～修論の指導教官をお願いして

「自然を自分の体と感性で感じる事が一番大切なことだ」という主題のもと、指導していただいたよう



94年頃、先生と島根半島にて

*株式会社シマダ技術コンサルタント
1994年度修了(1991年度卒業)

に思います。はじめてフィールドへ出かける前に、既往の地質平面図の閲覧を禁止されました。はじめは先生の意図するところが理解できませんでしたが、まずは自分自身の足と目でデータを取って来なさいということをおっしゃりたかったのだろうと後々になって理解することができました。いつもおっしゃっていたのは、「露頭の前で勝負しなさい」というお言葉です。「自分が一番、この地域の地質を詳しく知っているんだと自信を持って言えるようになりなさい」ということだと理解しております。先生は、時間の許す限りフィールドに出て私の疑問に対して、ご指導をくださいました。

勉強不足な点は厳しく叱ってくださり、自発的に勉強していく動機付けをしてくださいました。私の研究テーマは、最先端の機械を使うことはありませんでしたが、地質学のオーソドックスな手法のみを用いても新しい知見を得ることができました。文献をあさり、顕微鏡を覗きながら、自分のフィールドへ適合できるのかどうかを試行錯誤しましたが、このような地道な手法が私には合っていたのでしょう。

論文をまとめる際も、学生の私とも十分に議論していただき、お互いに納得のいく結果となるように導いてくださいました。時には陰悪な雰囲気にもなり、未熟だった私はどうして良いか分からなくなって、自分のその後の進路について自暴自棄になってしまったこともありました。しかしながら先生は、そのような私にも門を閉ざされることなく最後まで多くの機会を与えてくださいました。

多くのことを自由にさせてくださったこと

鳥根県工業技術センター（当時）の井上さんや地質調査所（当時）の鹿野さんなど多くの方々を紹介していただき、自分の研究の位置づけを第三者の目で確認していただくことの重要性を教えていただきました。知り合った方々からいただいたアドバイスについても、自由に実行させてくださいました。

修論作成時のアクシデント

海岸沿いで露頭観察をしている時でした。急な崖で動けなくなり、釣り人に助けを求めて警察および新聞沙汰になったことがありました。その夕方自宅で独りぼんやりしていると、アパートの共同ピンク電話が鳴りました。「ニュース見たけど、あれ、君だろう？」と温かくおっしゃってくださいました。本来ならば私の方から先生に一報を入れなければならないのですが、そのことを責められることもなく、翌日警察署までお詫びをしに付き添ってくださいました。

社会に出てからの挫折を支えてくださったこと

私は、最初に就職した会社で過労のために病気になり退職してしまったのですが、再就職先を紹介してくださったのも先生でした。その後も再三にわたり、仕事上の相談にのってくださいました。社会に出てからは学生時代に比べ、より多くの人と接するようになりましたが、人間関係の難しさに触れるにつれ、先生の寛大さを改めて感じることができました。

先生の期待のすべてに答えることができなかった私に対し、多くの機会を与えてくださり、今でも変わらずにご指導してくださることに心から感謝いたします。私も早く体調を戻し、先生とまた一緒に山を歩くことができるよう努力いたします。いつまでもお変わりなく、お元気でいらっしやることをお祈りいたします。